

長野遺跡群

# 善光寺門前町跡

—竹風堂善光寺大門口地点—

2006年12月

株式会社 竹風堂  
長野市教育委員会

## 序

古来より信仰を集めてきた善光寺は、日本を代表する寺院であり、国宝の本堂や重要文化財の三門、経蔵など境内には貴重な歴史的建造物が残されています。善光寺の周辺においても、善光寺に関連する宿坊や門前町など江戸期や明治初頭に建造された建物が数多く残されており、歴史的景観を活かした町並が形成されています。この善光寺周域には、善光寺創建をはるかにさかのぼる縄文時代から集落が営まれたことが判明しており、今も地中には貴重な文化遺産が眠っています。

2006年2月から行われた善光寺門前町跡の発掘調査は、善光寺門前の大町町にあたり、竹風堂善光寺大門店の建設に伴い株式会社竹風堂の委託を受けて長野市教育委員会が発掘調査を担当しました。調査では古墳時代の住居跡や中世の区画造成した痕跡、近世の半地下式の倉庫など善光寺創建以前から現在まで至る歴史的痕跡が多数認められました。調査によって判明した善光寺門前町跡の歴史は、市内にとどまらず全国から多くの注目を集めています。

本書はその成果を広く公開するとともに永く保存をはかることを目的とし、一連の記録を「長野市の埋蔵文化財第115集」として報告するものです。報告書の内容は、連絡とつづられてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役にいただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、株式会社竹風堂各位におかれましては、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査や現地説明会に際して多大なご尽力をたまわりましたことを厚く御礼申し上げます。

平成18年10月

長野市教育委員会  
教育長 立岩睦秀

# 例 言

1. 本書は、株式会社竹風堂による「竹風堂善光寺大門口」新築工事に伴い、記録保存を目的として実施した埋蔵文化財報告書である。
2. 埋蔵文化財発掘調査の実施に関しては、株式会社竹風堂と長野市との間で協定及び委託契約を締結し、平成17年度に発掘作業、平成18年度に整理及び報告書作成を実施したものであり、業務は長野市教育委員会（文化財課埋蔵文化財センター担当）が履行した。
3. 発掘調査地籍は、長野市大字長野字大門口511-1である。調査の結果、門前町として栄えた中世・近世の遺構を多数確認したことにより遺跡名称を「善光寺門前町跡」とした。
4. 発掘調査は、総面積413㎡のうち施工によって地下に影響が及ぶと判断された300㎡を対象に行われた。
5. 遺構図は、調査地において1:20で作成したものを原図に、1:100、1:200の縮尺で提示した。遺物図版は、原寸、1:2、1:3、1:4、1:6の縮尺で提示した。また、金属製品で腐蝕が進んだものについてはX線写真を掲載した。
6. 発掘調査で得られた記録、遺物は長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが保管している。

# 目 次

## 例言・目次

I 調査経過	1
1 調査に至る経過	
2 調査日誌	
3 調査体制	
II 遺跡の位置と環境	4
1 地理的環境	
2 考古学的環境	
3 歴史的環境	
III 調査成果	8
1 調査概要	
2 遺構	
3 遺物	

## 挿 図 目 次

図 1	調査位置図	1	図 10	区画溝出土遺物	27
図 2	地形図	4	図 11	遺構出土遺物	29
図 3	西町遺跡調査地点と今回の調査地点	5	図 12	遺構出土遺物	31
図 4	試掘トレンチ南壁土層堆積断面	8	図 13	遺構出土遺物	33
図 5	遺構全体図	9	図 14	遺構出土遺物	34
図 6	調査区西側遺構図	15	図 15	遺構出土遺物	37
図 7	調査区東側遺構図	16	図 16	遺構出土遺物	39
図 8	写真 2 7 古墳後期竪穴住居出土土器	23	図 17	遺構・遺構出土遺物	41
図 9	区画溝出土遺物	25	図 18	遺構外出土遺物	43

## 写 真 目 次

写真 1	表土除去	2	写真 19	SK 18	12
写真 2	現地説明会	2	写真 20	SK 29	12
写真 3	作業風景	2	写真 21	SK 28	13
写真 4	中央通りから出土した五輪塔	4	写真 22	SK 33	13
写真 5	現在の善光寺	6	写真 23	SK 34	13
写真 6	現在の門前町	6	写真 24	SK 13 出土瓦礫	14
写真 7	東側全景	9	写真 25	土蔵根石・地下室底面	14
写真 8	西側全景	9	写真 26	石組み井戸	14
写真 9	SB 1 土器出土状況	10	写真 27	古墳後期竪穴住居出土土器	23
写真 10	区画溝の掘り残し部分に 橋脚を埋設した跡	10	写真 28	遺構出土遺物 ( 5~34 )	24
写真 11	区画溝 ( SD 1 )	10	写真 29	遺構出土遺物 ( 35~40 )	26
写真 12	SK 6	11	写真 30	遺構出土遺物 ( 41~58 )	28
写真 13	SK 19	11	写真 31	遺構出土遺物 ( 59~73 )	30
写真 14	SK 21	11	写真 32	遺構出土遺物 ( 74~85 )	32
写真 15	SK 24	11	写真 33	遺構出土遺物 ( 86~103 )	34
写真 16	石組み溝	12	写真 34	遺構出土遺物 ( 104~117 )	36
写真 17	SX 1	12	写真 35	遺構出土遺物 ( 118~134 )	38
写真 18	SK 17	12	写真 36	遺構出土遺物 ( 135~148 )	40
			写真 37	遺構出土遺物 ( 149~171 )	42

## 表 目 次

表 1	善光寺の歴史	7	表 4	中世焼き物種類別破片数	18
表 2	遺構観察表	17	表 5	近世焼き物種類別破片数	18
表 3	遺構出土土器・陶磁器時代別破片数	18			

# I 調査経過

## 1 調査に至る経過

善光寺及びその門前町は古くから地域の商業・観光の中心として栄えた。現在もたくさんの観光客が訪れ、土地の人々の愛着も深い。縄文時代から江戸時代までの遺構・遺物を包蔵する「長野遺跡群」内に位置する。この善光寺門前の大門町において、株式会社竹風堂の店舗建設が予定され、埋蔵文化財の保護協議が進められた。平成17年6月21・22日の試掘調査によって近世の遺構が確認されると、建物基礎構造・工法の再検討を協議課題とした。しかし、建物基礎部分においては遺構保存が困難であり、記録保存を目的とする発掘調査が必要と判断された。また、発掘調査から調査報告書刊行にいたるまでに複数年度を要することから、平成18年1月17日に「埋蔵文化財発掘調査協定」が株式会社竹風堂と長野市教育委員会の間で締結された。発掘調査は、平成18年2月6日「平成17年度埋蔵文化財発掘調査委託契約」によって、株式会社竹風堂が長野市に委託し、埋蔵文化財センターが行った。調査は平成18年2月13日から3月23日までの39日間に渡って行われた。

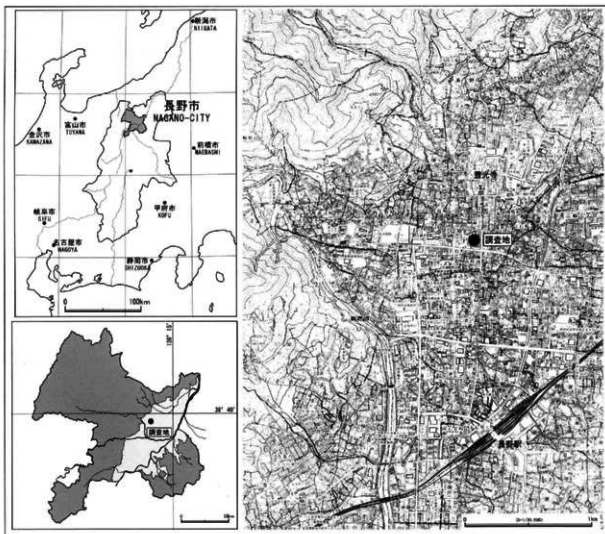


図1 調査位置図

## 2 調査日誌

【竹風堂大門店建設に伴う発掘調査】

平成18年2月13日 機材搬入

- 14日 調査区西側より表土除去 作業員による遺構検出開始
- 15日 表土除去継続、遺構検出と掘り下げを並行して行う
- 16日 遺構掘り下げに本格着手する
- 17日 調査区西側の表土除去完了、近現代ゴミ穴・近世土坑の掘り下げ
- 20日 近世土坑掘り下げ
- 21日 近世土坑掘り下げ
- 22日 調査区西側写真撮影、中世遺構掘り下げに着手
- 23日 調査区東側の表土除去、中世遺構掘り下げ
- 24日 中世遺構掘り下げ終了、写真撮影
- 27日 1回目遺構測量
- 28日 図面作成



写真1 表土除去



写真2 現地説明会

- 3月1日 雨天のため遺物洗浄作業を行う
- 2日 昨日の降雨に伴う排水、遺構掘り下げ
- 3日 廃土搬出作業
- 6日 雨天のため作業員休み、表土除去
- 7日 遺構検出、掘り下げ
- 8日 廃土搬出、遺構掘り下げ
- 9日 廃土搬出、遺構掘り下げ
- 10日 写真撮影
- 13日 遺構掘り下げ
- 14日 2回目遺構測量
- 15日 図面作成
- 16日 写真撮影
- 17日 遺跡見学会準備
- 18日 発掘調査現地説明会開催
- 20日 遺構掘り下げ
- 22日 3回目遺構測量、機材撤収
- 23日 写真撮影、図面作成、調査終了



写真3 作業風景

### 3 調査体制

発掘調査委託業務【委託者】 株式会社 竹風堂 代表取締役 竹村猛志

発掘調査委託業務【受託者】 長野市 長野市長 鷺沢正一

調査主体者	長野市教育委員会教育長	立岩睦秀
総括管理者	文化財課長	北村真一郎
総括責任者	局主幹兼埋蔵文化財センター所長	矢口忠良
庶務担当	係長	宮沢和雄
	職員	吉村久江 事務員 塚田容子
調査担当	係長	青木和明（調査員）
	主査	風間栄一 小林和子
	主事	宿野隆史（調査員）
	専門員	清水竜太（H17） 遠藤恵実子 長瀬 出 山野井智子（報告書作成）石丸敦史 小出泰弘 森田利枝（報告書作成） 宮沢浩司（H17） 山岸千晃 加藤拓也（H17） 小池勝典（H18） 柴田洋孝（H18）

遺構測量委託 株式会社 写真測図研究所

発掘調査事業の委託者である株式会社竹風堂におかれては、埋蔵文化財保護に対する深いご理解に基づき、円滑に調査事業を実施できるようご配慮を賜った。また調査期間中、株式会社滝澤建設をはじめとする工事関係者各位にご協力頂いた。厚く御礼申し上げたい。

報告書作成にあたって、出土金属製品のX線透過撮影は長野県立歴史館にご協力頂いた。古代瓦に関して、上田市立国分寺資料館館長倉澤正幸氏、中世遺物・遺構に関して、同志社大学助教授 鋤柄俊夫氏にご教示頂いた。記して感謝申し上げたい。

## II 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

長野遺跡群は裾花川河岸段丘と湯福川扇状地による複合地形上に立地している。湯福川扇状地は裾花川河岸段丘を覆って急傾斜をなし調査地では北西から南東に傾斜する。地盤は岩塊をふくむ砂礫堆積で水はけがよく堅致である。周辺の発掘調査では、善光寺門前町形成以前から居住域として利用されていたことが確認され、人間活動に好適な環境であったと捉えられる。

#### 人為による地形改変

現在、我々が生活している地上は各時代の事情によって造り変えられ、今日の姿になっている。門前町には古くから人が住み、様々な地形の改変が行われてきたと考えられる。災害復旧、町割りの整備、道路の敷設などは今日も同様に行われている事業であり、新しい地形を作り出す。たとえば、中央通りの歩道改修にともなう発掘調査では、地形を緩傾斜化するための土留めとして大量の五輪塔が再利用された様子が報告されている。また、幕末から近代初頭に起きた地震および火災の整地層は今回の調査でも確認され、門前町に広範囲に残るものと考えられる。



写真4 中央通りから出土した五輪塔



図2 地形図 (1:10000)



## 2 考古学的環境

調査地周辺では、平成7・8年に国道406号線・市道梶庁大門町線の道路拡幅に伴う発掘調査（西町遺跡・東町遺跡）および、関連事業として中央通りの歩道改修事業の工事立会を行った。

### 西町遺跡

縄文時代から現代に至る遺構を確認した。遺構の重複が激しく、縄文時代から古代の遺構は遺存状態が悪い。中世段階の遺構は大門地区に集中する。13世紀から15世紀後半に相当し、門前町形成に関わると考えられる遺構・遺物である。近世段階は、火災整地および近代以降の建築物基礎により破壊され残存状態は悪いが、門前町の商工業に関連する遺構・遺物を確認した。

### 東町遺跡

弥生時代から近世に至る遺構を確認した。弥生・古墳時代の遺構は湯福川の氾濫堆積に厚く覆われているため依存度がよい。この氾濫堆積上に中世・近世面を確認した。

### 中央通り工事立会

近世石積み・近代水路を確認した。これらの遺構は五輪塔を再利用したもので、750個を回収した。

以上の調査成果と今回調査の成果を併せて概観すると、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が確認され、中世・近世の遺構密度から門前町の形成と発展が想定できる。西町遺跡A地区で発掘された溝SD1は今回調査区の区画溝（SD1）と平行する位置関係にあり時期も同じ（13世紀後半）ことから当時、善光寺を中心とする一帯に土地整理事業が行われ、それは12世紀末の善光寺再興にともなうものであったと想定する。

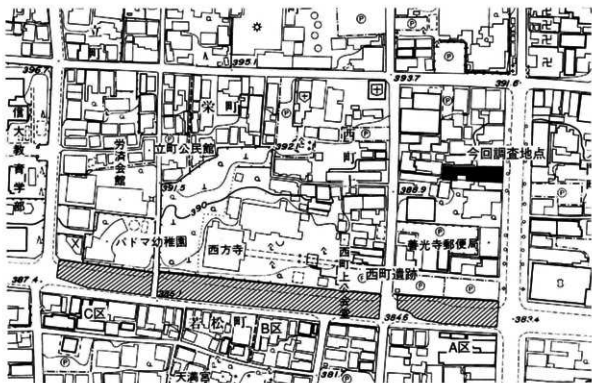


図3 西町遺跡調査地点と今回調査地点（1：2500）

### 3 歴史的環境

#### 善光寺の成立

善光寺の僧職である「善光寺別当」が初めて文献史料に登場するのは1096年の記録（『後二条師通記』）である。それ以前の善光寺については『善光寺縁起』、平安時代の仏教説話集（『僧妙達藤生注記』等）、本尊の様式、旧境内から出土した古代瓦から推測されるにすぎない。平安時代末期から中世にかけては極楽浄土の教えが広まった時代であり、善光寺は阿彌陀信仰の霊地として発展していった。しかし1179年、火災によって寺は消失し礎石を残すのみだったという（『吾妻鏡』）。1191年源頼朝の命により再建され、その後も時の権力者の庇護をうけた。戦国時代末期には上杉謙信・武田信玄が本尊を移したことにより一時衰退したが、江戸時代に入り再興された。元善町にあったそれまでの本堂が今の位置に造営されたのは1707年（宝永4）のことである。



写真5 現在の善光寺

#### 門前町の成立

善光寺は、1707年（宝永4）までは今の元善町に本堂があり、県道豊野線は本堂に直行する参道であった。また、現本堂が位置しているところには北之門町があり、本堂の移転に伴って立ち退きとなった。このように、移転以前の善光寺門前町は、本堂を中心に東西南北の参道に沿って発達していたことがうかがえる。この景観は、参道に参詣者目当ての商人・職人が集住したのがはじまりであると考えられ、その後商業地として特化したものである。西町遺跡や今回の発掘調査結果からは半地下式建物（倉庫か）、陶磁器、渡来銭が出土し、遅くとも14世紀後半（室町時代）には町場として機能していたと考えられる。『大塔物語』には応永6年（1399年）信濃守護職に就いた小笠原長秀が、翌7年（1400年）善光寺に参詣し「凡そ善光寺は、三国一の霊場にして（中略）門前に市をなし、堂上花の如く」道俗男女・貴賤上下でにぎわう様子が書かれている。

江戸時代は街道ごとに宿場が整備され各地の寺社参詣が盛んになった時代である。中でも善光寺参りは多くの旅行案内記が刊行されるほど人気があった。北国街道善光寺宿である大門町は旅館屋営業の特権を持ち、『東海道中膝栗毛』で有名な十返舎一九も大門町で宿泊している。そして『膝栗毛』中では弥次さん・喜多さんも町方旅館に宿泊するのである。



写真6 現在の門前町

表1 善光寺の歴史

西暦	和暦	善光寺・門前町に関する事象	時代
9世紀後半		瓦葺きの建物が存在（善光寺前身寺か？）	平安
1179	治承3	火災により善光寺焼失（『吾妻鏡』）	
1187	文治3	源頼朝が信濃国日代等に善光寺再興を命じる（『吾妻鏡』）	鎌倉
1191	建久2	善光寺再建落成（『吾妻鏡』）	
1268	文永5	善光寺で火災（『見聞私記』）	室町
1313	正和2	善光寺で火災（『統史感抄』）	
1370	応安3	火災により善光寺全焼（『花宮三代記』）	
1413	応永20	金堂再建（『三井統徳記』）	
1425	応永32	善光寺で火災との噂が京で広まる（『看聞日記』）	
1427	応永34	善光寺で火災（『王代記』）	
1474	文明6	火災により如来堂焼失（『尊徳大僧正記』）	戦国
1558	永祿1	武田信玄が本尊を甲斐に移す（『王代記』）	
1597	慶長2	豊臣秀吉が甲斐善光寺如来を京都方広寺大仏殿に移す（『甲斐善光寺文書』）	江戸
1598	慶長3	本尊が信濃に戻される（『梵輝日記』）	
1599	慶長4	豊臣秀頼が如来堂を再建（『御選歴録起』）	
1601	慶長6	徳川家康が善光寺に千石の領地を与える（『善光寺文書』）	
1615	元和1	落雷により本堂（如来堂）焼失、諸堂・寺中全焼（『御選歴録起』）	
1642	寛永19	仮堂が焼失、同年に仮堂建立（『善光寺本堂建立由来留書』）	
1650	慶安3	仮堂に入仏（『善光寺本堂建立由来留書』）	
1666	寛文6	仮本堂（寛文如来堂）を再建	
1688	元禄1	東之門町から出火、横町等焼失（『善光寺史』）	
1692	元禄5	本堂再建の為の出聞帳が寺社奉行より認可される（『善光寺本堂再建回國動化記』）	
1700	元禄13	火災により再建中の本堂焼失（『善光寺史』）	
1705	宝永2	西之門町より出火、大本願・三寺中・東之門町等焼失（『長野史料』）	
1707	宝永4	本堂再建（『善光寺本堂建立由来留書』）	
1750	寛延3	山門再建（『さざれ石』） 堂庭の販売商品について、大門町から訴えあり（『長野市史考』）	
1751	宝暦1	西之門町より出火、大本願・町屋一帯1500軒を焼失（『観音堂録起』）	
1759	宝暦9	経蔵落成（『善光寺別当伝略』）	
1830	天保1	宿坊と大門町が旅客の宿泊について争う（『大勧進文書』）	
1846	弘化3	大門町以外の宿屋営業を禁ずる（『長野市史考』）	
1847	弘化4	善光寺地震により家屋3000戸、仁王門・大本願等焼失（『むし倉日記』）	
1864	元治1	仁王門再建（『善光寺取調書』）	
1871	明治4	上知令により善光寺領を中野県（のち長野県）に編入	
1891	明治24	5.24東之門町から出火、伊勢町・岩石町・元善町焼失 6.2上西之門より出火、仁王門・大本願・院坊・元善町等焼失	
1908	明治41	本堂特別保護建造物に指定	近現代
1918	大正7	仁王門再建	
1953	昭和28	本堂が国宝に指定	
1965	昭和40	三門・経蔵が重要文化財に指定	

### Ⅲ 調査成果

#### 1 調査概要

今回の発掘調査地は大町中央通り沿いの商店跡地にあり、善光寺門前町の中核をなしてきたところである。このことから、① 古代善光寺の様相 ② 中世門前町の形成過程 ③ 近世門前町における町屋構造に留意し、時代ごとの土地利用を把握することに努めた。

#### 調査の方法

試掘調査の結果より遺構検出面を整地層直下に設定、重機で整地層を除去した。その後遺構検出及び遺構掘り下げを人力で行った。検出した遺構の中で特に掘削深度の大きいもの、巨礫が混入するものについては作業上の安全面を考慮して未完掘である。遺構の記録保存について、遺構実測図作成に係る測量を株式会社写真測図研究所に業務委託し、調査員が現地で作図した。遺構写真撮影は35mm一眼レフカメラ、モノクロネガ・リバーサルフィルムを用いた。

#### 基本層序

堆積土層は基本的に4層に分けられる。

I層：近代整地層 調査区全面を覆い、火災瓦礫・炭・焼土を含む部分がある。

Ⅱ・Ⅲ層：古墳時代から中世・近世遺構覆土 各時代の遺構が後世の削平によってI層直下に確認できる状況である。

Ⅳ層：基盤層 河川堆積による層で角礫を多く含み、縄文土器が小破片で出土している。調査区北西から南東に傾斜する。

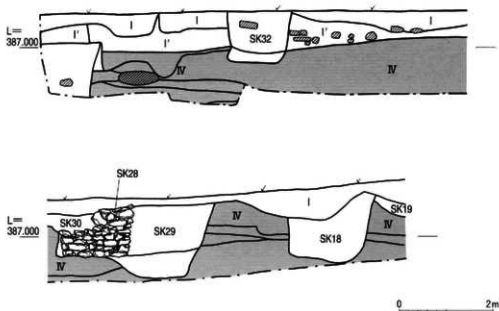


図4 試掘トレンチ南壁土層堆積断面(1:80)

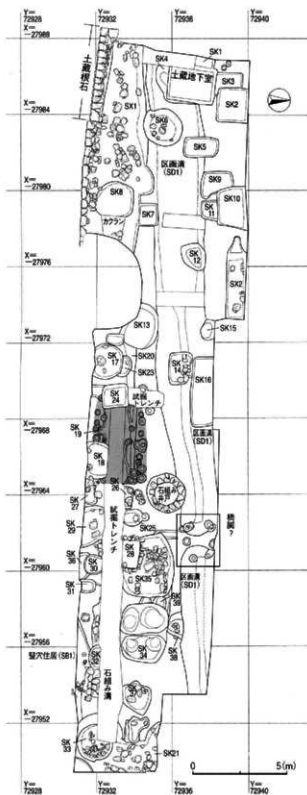


写真7 東側全景



写真8 西側全景

## 2 遺構

### (1) 古墳時代

後期の堅穴住居跡(SB1)を1軒確認した。この住居は江戸時代の石組み溝に破壊された状況であり、当時の生活面は失われている。後世の土地改変の状況がよく分かる遺構検出例である。

溝底面から住居床面までの高さは一30cmを測る。地面を掘り下げて住居の床面を造り出す堅穴住居の性質から考えて、古墳時代の生活面は現況よりも高い位置にあったと想定できる。

住居の大部分は調査区外にあり、残存部分から推定して北東方向に軸を持つ。北東隅は石組み溝に破壊され、その周辺から煮炊き具である甕・瓶、焼土がまとまって出土している。この付近にカマドがあったと考えられる。土器の特徴から7世紀を中心とする時期に相当する。



写真9 SB1土器出土状況

### (2) 中世

中世は鎌倉時代から戦国時代までの約400年間の総称で、今回の調査で確認できたのは①13世紀後半(鎌倉時代)の区画溝跡(SD1) ②14世紀後葉から15世紀後葉(室町時代)の土坑SK6・SK24 ③16世紀後葉から17世紀初頭(戦国時代)の堅穴建物跡SK19・大型土坑SK21(下層)の3時期である。



写真10 区画溝の掘り残し部分に構脚を埋設した跡



写真11 区画溝(SD1)

### ① 13世紀後半（鎌倉時代）

区画溝（SD1）(写真11)は、上部は削平されており、遺構検出面において幅約2.5m 深さ約0.9mを測る。埋土の堆積状況から溝の北側が南側より高かったと推測される。調査区を東西方向にほぼ一直線に走り、断面V字形に掘られている。約90m 南に位置する西町遺跡でも東西方向の同様な溝跡が発掘されていることから、土地を区画する機能を持った溝であると考えている。善光寺周辺に計画的な土地区画が存在していたことが想定される。また、溝を掘り残した部分に二対の柱穴が見つかり、橋脚を建て架橋した痕跡であると考えている。(写真10)

出土した遺物の時期は縄文時代から江戸時代にわたるが、他の遺構との重複関係及び出土遺物の破片数から中世に属すると判断した。13世紀後半から埋没し始め、14世紀後葉から15世紀後葉にはほとんど埋没していたと推測される。

### ② 14世紀後葉から15世紀後葉（室町時代）

区画溝が埋没したことによって当時の善光寺及び門前の地割りは変化したと推定される。SK6は埋没した区画溝を掘り込む大型の穴だが、その性格は不明である。ほぼ同じ時期の方形土坑SK24は現況での深さが1.7mあり、かなり深い穴である。井戸・便所等の性格が考えられるが、それを証左する状況は確認していない。

### ③ 16世紀後葉から17世紀初頭（戦国時代）

SK19は、東西約4m 南北1.5mの長方形の堅穴と、その周囲に並ぶ柱穴からなる。本遺跡においてSKI9の性格を示す遺物等は確認できなかったが、このような建物遺構は「宿」・「市」と関連して理解されることが多く、門前町という遺跡の性格を特徴づける遺構である。SK21の上層は近世遺構が何基か重複していると考えられ平面形は不整形である。下層の中世遺構は深さが現況で1.6m以上を測る大型土坑で、調査区外へつづく。



写真12 SK6



写真13 SK19



写真14 SK21



写真15 SK24

### (3) 近世

江戸時代になると善光寺参詣の人々で門前町はにぎわった。今回の調査でも大半を占めるのは江戸時代の遺構である。中でも出土陶磁器から江戸時代中期から後期に相当する。しかし、その性格について推測し得る遺構は、① 境界に関する遺構 ② 地業に関する遺構 ③ 井戸・便所・ゴミ穴 ④ 貯蔵施設、と少数である。

#### ① 境界に関する遺構

石組み溝 丸石と平石を二列に並べた溝状遺構で、水路として利用されたというよりは、境界施設の石列、家屋の雨落ち溝としての性格を考えている。

#### ② 地業に関する遺構

SX1は、堅くしまる砂と人頭大の石によって埋まられた遺構で、建物の基礎根固めと考えている。このような基礎工事はかなり重量のある建物に対して行われ、建物の沈下を防ぐ目的がある。SK20はSX1の続きである。

#### ③ 井戸・便所・ゴミ穴

SK17・18・29は直径約2.0m、現況で深さ約1.5m(SK17・29は未完掘)の大型の穴である。このような遺構は、井戸・便所・ゴミ穴といった性格が想定されるが、それにはこれらの遺構に特徴的な状況を検証しなければならない。井戸の場合、大きく素掘り井戸・木組み井戸・石組み井戸・桶を埋設する井戸に分けられる。井戸を廃棄する際には「息抜きの筒」と称される、節を抜いた竹筒が立てられる場合がある。便所は、



写真16 石組み溝



写真17 SX1



写真18 SK17



写真19 SK18



写真20 SK29



埋桶式便槽・埋甕式便槽・埋枘式便槽が江戸遺跡で見られているが上記の構造物が見えない場合、その特定は難しい。そのため遺構堆積土を分析して寄生虫卵の個数によって特定する方法もとられている。ゴミ穴の定義は難しく、穴蔵や井戸が不要になった場合にもゴミ穴に転用される例もある。しかしSK17・18・29ともに遺構の性格を決定づける所見は得られていない。SK17は埋土の堆積状況から、穴の内側に桶が設置してあった可能性が高い。

#### ④ 収蔵施設

SK28は石組みの地下室で床下の収納施設と考えられる。SK33は直径3mの堀方を掘り、その中に直径2mの桶を設置した造りが推定される。桶は抜き取ったか腐蝕したか残っていない。底面には拳大の石を敷く。SK34には中央に東西を仕切る壁面が設けられ、東西それぞれの下層部分がさらに2穴にわかれた底面が構成されている。底面は一分が硬くしまっており、大型の桶あるいは甕を4個体埋設するための構造であると考えられる。床下の貯蔵施設を想定する。

以上のように地面を深く掘り込んだ床下施設のような遺構は、後世の削平を受けても比較的残りやすい。反対に柱を支える礎石など地表の遺構は失われやすく、礎石が失われると建物の痕跡は残らない。残った遺構から建物の構造を明らかにするには、遺構の配置及び密度が手がかりとなる。

- 調査区西側に比べ東側は遺構が密集している。同一時期に存在した遺構は見かけよりもすくないが、重複を避けながらも同一地面に掘り直されたと考えられる。東側と西側では土地利用が異なっていた可能性が高い。

- 調査区は現在の中央通りに面しているが、江戸時代の北国街道の道幅17尺(5.1m)から推定される表開口は5mほど東にある。また、遺構配列から町屋空間を復元し遺構の性格を同定することは可能である。調査例の増加を待って遺構配列をパターン化し検討すべき課題である。



写真21 SK28



写真22 SK33



写真23 SK34

#### (4) 近世から近代

##### 瓦礫整理

弘化4(1847)年の善光寺大地震、直後の火災により門前町は全焼した。その後の災害復旧によって更地化されたのが現在の地表面である。この火災整地層は焼土を多く含む。火災整地層を除去すると焼けた瓦・壁土が遺構のくぼみに投棄された状況が確認できた。SK16は上層に火災瓦礫が充填され、埋没途上の穴に瓦礫を一括廃棄したものと考えられる。SK13は焼けた瓦・壁土の他に、高温のために金属と融着してしまった陶磁器が出土している。瓦は高熱により発泡している。



写真24 SK13出土瓦礫

#### (5) 近代から現代

##### 土蔵基礎・地下施設

前店舗が使用していた土蔵の根石部分である石垣2段と地下室を確認した。根石直下には砂利を埋め込んで根固めとした基礎部分のみとめられた。

地下室の底面は叩き仕上げとなっている。煉瓦・ランプホヤなどの近代遺物が充填し、土蔵解体以前にはゴミを埋めて廃絶していたと理解される。



写真25 土蔵根石・地下室底面

##### 石組み井戸

構築年代は不明だが、現代まで使用されていた井戸で今も水を湛えている。自然石を一部加工して積んだもので、深さは測っていないがかなり深い。内法直径約1.2m、堀方直径2.2mをはかる。



写真26 石組み井戸



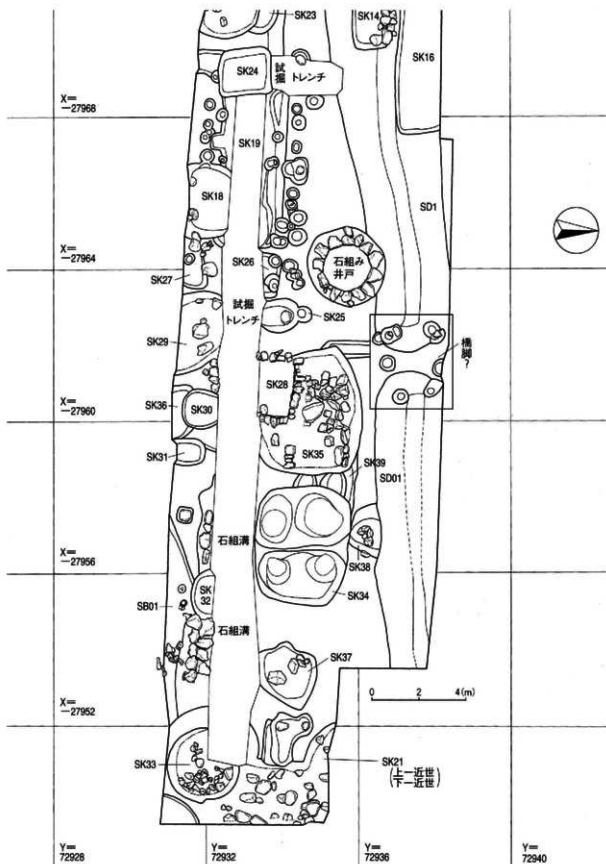


図7 調査区東側遺構図 (1:100)

表2 遺構観察表

遺構No.	時期	遺構		遺物	
		平面形・規模	備考	概要	質量(kg) 実測
SB01	古墳時代後期(7c後半)	不明、北東軸	壘穴住居、竈	壘、瓦製甕、甕、鉢	4.74 4
SD01	中世(13c後半~14c)	幅2.5m、東西方向	区画溝・橋脚跡 調査区外へ続く	土師皿、古瀬戸・珠洲・青磁 瓦・銭・打製石芥	10.69 25
SK01	近世	不明		土師皿、陶器、石鍋	0.27
SK02	近世	方形	未完掘、調査区外へ続く	土師皿、陶磁器、青磁	0.32 1
SK03	近世	方形		土師皿、磁器、青磁	0.02
SK04	近世	不整形		土師皿、陶磁器、青磁	0.18
SK05	幕末(18c後半~19c)	長方形、1.9×1.1m		土器、灰釉陶器、陶磁器	0.18 1
SK06	中世(14c後半~15c)	円形、直径2.0m		土師皿、瓦貫香炉、古瀬戸	1.91 6
SK07	近世(18c)	方形、1.2×1.0m		土器、陶磁器	0.07
SK08	近世(18c)	円形、直径2.0m	未完掘	肥前陶器	0.01
SK09	近世	不整形、長軸1.7m		磁器	0.01以下
SK10	近世(18c)	方形、一辺2.2m	未完掘、調査区外へ続く	土器、磁器	0.17 1
SK11		方形			
SK12	中世(15c)	不整形、長軸1.5m		土師皿、磁器、在地摺鉢	0.69 4
SK13	幕末(19c)	円形、直径2.4m	火災瓦礫整理坑	土師皿、陶磁器、磁石	1.53 3
SK14		長方形、1.7×1.2m		土師皿、陶磁器、青磁	0.15 2
SK15		不整形		土師皿、陶磁器、磁石	0.19
SK16	幕末(19c)	長方形	上層は火災瓦礫調査区外へ続く	土師皿、陶磁器	0.6 1
SK17	近世(18c)	円形、直径1.9m	井戸?調査区外へ続く	土器、土師皿、陶磁器、銭 物遣体(南)	0.86 3
SK18	近世	円形、直径2.0m	調査区外へ続く	土器、陶磁器	1.11 7
SK19	中世(16~17c初め)	長方形、4.0×2.0m	竪立柱を伴う壘穴建物	土師皿、津洲宮磁器、銭	0.14 1
SK20	近世	不整形	SK01の続きか	土師皿、磁器	0.19
SK21	近世(上層)	不整形	数基の遺構重複か	土師皿、瓦貫風炉、大甕	
SK21	中世(16~17c初め)	不整形	未完掘、調査区外へ続く	在地摺鉢、青磁、瓦、磁石	3.1 7
SK22	中世	長方形、0.9×0.6m		土師皿	0.06
SK23	中世	不明		土師皿、磁器	0.05
SK24	中世(14c後半~15c)	長方形、1.4×1.2m		土師皿、古瀬戸、在地摺鉢、瓦	1.19 5
SK25	近世	不整形		土器、陶磁器	0.14 1
SK26	中世	不整形		土器、土師皿	0.02
SK27	近世	方形	調査区外へ続く	土器、陶磁器	0.07
SK28	幕末(18c後半~19c)	方形、2.0×1.5m	石組み地下室	土師皿、陶磁器、銭	1.59 6
SK29	幕末	円形、直径2.0m	底面付近瓦礫混入 未完掘、調査区外へ続く	土器、土師皿、陶磁器 磁石、ガラス製品	0.65 3
SK30	近世	円形、直径1.0m		土師皿、陶磁器	0.09
SK31	近世	長方形		陶磁器	0.15
SK32	近世	円形		土師皿、陶磁器	0.12
SK33	近世	円形、直径2.0m 側方円形、直径3.0m	貯蔵施設 底面に礎を敷く	土器、土師皿、陶磁器 一分利金、蓮水通宝、磁石	1.72 3
SK34	近世	長方形、3.2×2.5m	貯蔵施設	土師皿、陶磁器、香石、手鏡	0.83 5
SK35	近世	長方形、3.3×2.6m	未完掘、瓦礫混入	陶磁器、寛永通宝	0.17
SK36	近世	不整形		陶磁器	0.05
SK37	近世	不整形		陶磁器	0.02
SK38	近世	不整形		陶磁器	0.18 1
SK39	近世	不整形	灰堆積	陶器	0.09
SK01	近世	不整形、東西方向	建物基礎根拠のみ	土師皿、陶磁器、瓦	0.91
SK02	中世	不整形	未完掘、調査区外へ続く	土師皿、陶磁器、穿孔石製品	0.92 3
石組溝	近世	残存不良、東西方向	地境		

### 3 遺物

#### (1) 概要

遺構から出土した遺物の時期は縄文時代から近世である。遺物は大きく焼き物（土器・陶磁器）・土製品・金属製品（古銭・釘など）・石製品（打製石斧・砥石）・ガラス製品・動物遺体（骨・歯）に分けられる。出土遺物の中で多数を占めるのは焼き物で、種類も多い。焼き物の種類を分類し、その多寡によって、遺構の層属年代を推定した。また、遺跡・遺構の性格等が反映されるのではないかと考え、遺構から出土した焼き物の破片数を集計した。そしてそれらを時代別に、古代以前・古代、中世、近世、不明に分けた（表3）。この中で多数を占める中世、近世についても焼き物の種類別に分類した（表4・5）。時代別出土破片数では古代以前・古代が6%、中世が55%、近世が33%、不明が5%を占める。

古代以前・古代の遺物は中世・近世の遺構に混入して出土しほとんどが小破片である。

中世遺物の年代は13世紀から17世紀初頭に相当する。中世の遺物の中で多数を占めるのは土師皿で約74%、次に国産陶器（古瀬戸・美濃・常滑・山茶碗・珠洲）、内耳土器、中国産磁器（龍泉窯・漳州窯）、在地産陶器（摺り鉢）、瓦質土器（香炉・風炉）と続く。各遺構で土師皿の量が最も多い。13世紀後半を中心とする区両溝（SD1）で85%、14世紀後半から15世紀後半（室町時代）のSK6で93%、SK24で78%、16世紀後半から17世紀初頭（戦国時代）のSK19で60%、SK21で67%を占める。土師皿の卓越は中世の特徴ともいえるが、宴会・儀式において「一度限りの器」として大量消費された結果と解釈されている。

近世遺物の年代は17世紀から19世紀に相当し、その中でも17世紀後半から18世紀代が多数である。肥前系磁器（古伊万里）が約74%を占め、瀬戸美濃系陶器、肥前系陶器、瀬戸美濃系磁器と続く。18世紀代は肥前系磁器の大量生産・大衆化の時期であり集計結果に表れている。器種別では碗類が多いのが特徴であり、中でも喫茶に用いた湯飲み碗、茶碗が多い。

表3 遺構出土土器・陶磁器時代別破片数

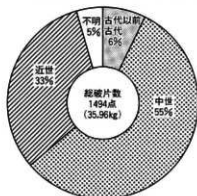


表4 中世焼き物種類別破片数

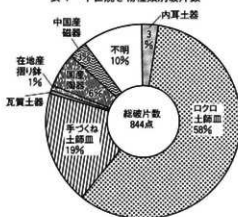
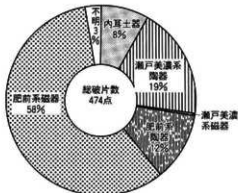


表5 近世焼き物種類別破片数



以上の出土遺物の他に、木製品が一定量存在したと考えられるが、これらが全く残存しない理由として調査区の土壌の性質や破損後の処理に起因していると推測する。

## (2) 古代・古代以前

縄文時代—SD1出土の打製石斧がある。(図10—40) 粘板岩で作られている。

弥生時代—SK29出土の土製円盤。(図15—110) 土器のかげらを削って作ったもの。この他に後期の土器片が出土している。

古墳時代—竪穴住居出土の甕(図8—1・2)、鉢(図8—3)、甌(図8—4)で調理具である。甕をカマドに据えて水を沸かし、その上に甌をのせて穴から出る蒸気で食物を蒸した。この他に甕の破片が出土している。

古代—奈良時代・平安時代を指す。土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦・瓦塔が出土している。この中で図化し得たものは、区画溝出土の土師器碗底部(図8—5)、土師器小型甕底部(図8—6)、瓦(図9—35・36・37)、瓦塔(図9—38・39)とSX1出土瓦(図17—136)である。土師器碗は10世紀後半から11世紀代のもと考えられる。瓦の年代は、年代観の指標となる文様を施した軒丸瓦・軒平瓦が出土していないことから不明であるが、古代の瓦造りの技法が認められる。36は丸瓦、37は平瓦である。本瓦葺きの凸面に丸瓦が、凹面に平瓦が使われた。35は棟の部分に使われた道具瓦である可能性が高い。窯に入れて焼く前に叩いて空気を抜いた痕が残る。35・36は平行に刻み目をつけた板で、37は縄を巻き付けた板で叩いた。これは焼成時の破損を防ぐために行われた。瓦塔は粘土で造られ窯で焼かれた仏塔である。三重塔・五重塔を模して造られた。38は屋根の部分で瓦の表現がある。39は仏塔の基礎である基壇部で階段状の造りである。

## (3) 中世

焼き物の種類は、

- ・素焼きの土師皿、内耳土器、炭素を吸着させ光沢を出した瓦質土器
- ・石川県珠洲市で焼かれた珠洲焼(須恵質)
- ・愛知県瀬戸地方、岐阜県美濃地方東部の古瀬戸・大窯(灰釉・鉄釉)・山茶碗(無釉・焼きしめ)
- ・愛知県常滑市の常滑焼(無釉・焼きしめ)
- ・在地産土器(須恵質・土師質の播り鉢)
- ・中国産輸入磁器(龍泉窯系青磁・漳州窯染付)

が出土し、他に土製品・金属製品(渡来銭)、石製品(石鍋・砥石・温石・五輪塔)がある。遺物の年代は、古瀬戸製品(14世紀から15世紀)、大窯製品(16世紀から17世紀初頭)龍泉窯系青磁(13世紀代)を軸に決定した。また、用途別に分けると、食物を供する食膳具(皿・碗)、調理具、煮炊具、貯蔵具、その他調度に分けられる。

### ① 食膳具

碗—古瀬戸平碗(図9—23、図11—48、図14—102)、龍泉窯系青磁碗(図11—42)23は15世紀代、48・102は14世紀代に相当する。42は13世紀代の所産である。この他に大窯鉄釉茶碗、大窯灰釉丸碗が出土している。

皿—土師皿が多数を占める。土師皿はロクロ使用のもの、手づくねのものがあり、それぞれ大小2つのサイズがある。遺構出土ロクロ土師皿492点(図9—18—21、図11—44—47、図11—52・53、図13—78—80、図14—103—106)、遺構出土手づくね土師皿160点(図8—7—17、図11—51、図11—58)を数える。ロクロ土師皿が在地の技術の系統上にあるのに対して、手づくね土師皿は京都の土器の影響を強く受けたものと理解さ

れている。その影響は「器の形」だけでなく、「器の使用方法（宴会・儀式での大量消費）」にも及んだと解釈される。煤・油煙が付着するものもあり、灯明皿としても使われた。手づくね土師皿は13世紀後半、ロクロ土師皿はSK6・24のものが14世紀代から15世紀代、SK21のものが16世紀代に相当すると考えている。この他に、13世紀代の山茶碗小皿（SD1 図9-22）、上等品の龍泉窯青磁大皿（図9-24）、漳州窯染付（図13-74）、古瀬戸深皿、大窯小皿が出土している。

## ② 調理具

播り鉢・捏ね鉢—在地産須恵質播り鉢（図11-54、図13-82）土師質播り鉢（図13-81）が出土している。在地産須恵質播り鉢はその形態・色調（青灰色）から珠洲焼播り鉢を模倣したものと指摘されている。この他に13世紀代珠洲焼播り鉢、大窯錆軸播り鉢、常滑焼捏ね鉢が出土している。

## ③ 煮炊具

内耳土器—図なし。鍋の内側に吊り手を持ち、火上に吊して使用した。近世以降には焙烙となった。小破片での出土のため中世のものと近世のものとの判別は難しい。

石鍋—図なし。長崎県西彼杵半島で生産された、滑石製の鍋。外面に煤が付着している。

## ④ 貯蔵具

甕—図なし。珠洲焼甕、珠洲焼瓶類、常滑焼甕が出土している。

## ⑤ その他調度

香炉—香を炊く器。瓦質土器香炉（図11-49）、大窯鉄軸香炉が出土している。

風炉—茶道具。図なし。瓦質土器風炉1点

渡来銭—平安時代末期から室町時代にかけて中国から輸入された貨幣。近世になって1670年に渡来銭使用禁止令が出された後も寛永通宝に混せて使用されていたらしい。遺構からは、熊寧元宝（図13-75）、元豊通宝（図14-86・87・89）、洪武通宝（図16-131）、開元通宝（図9-27）、皇宋通宝1点（図14-88）、元祐通宝1点（図9-28）、永樂通宝（図14-90、図15-114、図15-115）が出土し、いずれも銅銭である。

砥石—図なし。中世遺構からは3点出土している。

温石—暖めてカイロのように用いた。滑石製（図17-137）が出土している。

五輪塔—供養塔、墓標。中世以来、今日も造られている。空風輪（図16-123）、火輪（図14-97）が出土したが、いずれも近世遺構に廃棄された中世の所産であると考えている。

土製品—土師皿の破片に穴をあけたもの（図9-26）

## （4）近世

焼き物の種類は、

- ・内耳土器・土師質土器・瓦質土器
- ・肥前系磁器（古伊万里）
- ・肥前系陶器（唐津など）
- ・瀬戸美濃系磁器
- ・瀬戸美濃系陶器
- ・不明陶器（上記以外の陶器、在地産を含む可能性がある）

が出土し、他に金属製品（銭・手鏡など）、石製品（砥石・碁石・石臼）、ガラス製品（かんざし）がある。遺物



の年代は17世紀代から19世紀代に及ぶが、17世紀後半から18世紀代を主体としている。用途別に、食膳具、調理具、煮炊具、その他調度に分けられる。

#### ① 食膳具

碗一 染付丸碗と染付筒形碗。染付丸碗は、肥前系染付（図12—62、図15—107、図18—158・159）、瀬戸美濃系染付（図18—160）がある。染付筒形碗は肥前系磁器（図11—50、図18—154・155・156）があり丸碗よりもやや新しい。18世紀後半から19世紀初頭にかけて流行した。瀬戸美濃系磁器は18世紀後半から生産が始まった。菊散らし文（107）、七宝つなぎ文（154）、源氏香文（106）、四方禪文（62）、見込み五弁花文（41・50・62・107・156）、高台内の「大明年製」（71はかなり崩れている）、渦福（41）など18世紀に流行した文様が多い。また、コンニャク印判による絵付け（50・156は手描きと併用）も18世紀を中心に行われた。

碗二 飯碗。肥前系染付（図12—63、図12—71、図16—124、図18—157）がある。63・71・157は「くらわんか手」とよばれる厚手の日常雑器である。63・157の見込みは、窯焼き前に軸葉を丸く削っており「蛇の目軸はぎ」と呼ばれる。これは器を重ねて焼く時、軸葉が溶けて器どうしが溶着しないように工夫された手法で、この方法によって一度に大量の器を生産した。17世紀末から見られる手法である。124は菊散らし文。

碗三 碗一よりは大幅りで陶器製。肥前系陶器（図12—66・67・70、図14—103、図15—104）、瀬戸美濃系陶器（図17—135）、産地不明陶器（図12—68）がある。70・104は京焼を模倣した「京焼風陶器」と呼ばれるもので、灰釉が施釉され薄く丁寧なつくりである。70の高台内には「清水」の刻印がある。66は朝鮮半島の呉器を模倣した「呉器手」と呼ばれるもので灰釉が施釉される。これらは17世紀後半に流行した。

皿一 肥前系染付（図12—72、図18—153）。72は変形皿で型打ち成形された。153は唐草・見込み五弁花文。

小杯一 肥前系染付（図16—125、図18—151）

蓋一 肥前系染付（図15—106）、銅製（図13—77）

盃一 肥前系染付見込み紅葉文（図15—116）、肥前系白磁（図18—150）

徳利一 瀬戸美濃系陶器（図11—43、図15—105）43は唇口の徳利。105は潤徳利で底部には「司□府□」の墨書がある。「司」は屋号か。これらは19世紀に現れる形である。43・105ともに鉄釉に灰釉が施釉される。

#### ② 調理具

播り鉢・控ね鉢一 肥前系陶器播り鉢（図11—57、図15—109）、不明陶器（図15—117）、肥前系陶器控ね鉢（図12—69）57・109は鉄釉、69は鉄釉に白化粘土で波状刷毛目を施す。

石臼一 下白（図12—73）

#### ③ 煮炊具

内耳土器一 図なし、小破片が出土している。

#### ④ その他調度

香炉一 肥前系青磁（図11—56、図18—149・150）「蛇の目軸はぎ」の高台である。56は凹形高台。

仏飯器一 肥前系染付（図12—61）、肥前系青磁（図16—126）

灯明受け皿一 瀬戸美濃系陶器（図18—148）

水指一 茶湯道具の一種。瀬戸美濃系陶器（図15—108）

火入れ一 土師質（図17—146）、瓦質（図17—145）

植木鉢一 瀬戸美濃系陶器（図17—147）

醤油壺—肥前系色絵（図18—161）

人形—肥前系磁器（図13—83）17世紀後半に盛んに制作されたもの。

水滴—硯に水を入れるための文房具。肥前系染付（図11—55、図12—60）

戸車—肥前系磁器（図18—162）

手鏡—銅製（図16—127）梅花文、「天下第一」銘あり。

キセル—銅製（図9—34、図13—84・85）34は雁首、17世紀前半から18世紀前半にある形である。84・85は吸い口。

釘—鉄製（図12—65、図16—134）

錢—寛永通宝（図9—29・30、図12—59、図12—64、図16—119—121、図16—129・130、図16—134、図18—165～169）

雁首錢—キセルの雁首をつぶした偽錢（図15—115）

元禄一分判金—（図16—118）表に桐、裏に「元」「光次（花押）」が彫られる。表面と裏面に両替商の刻印がある。

不明金属製品—木の葉形銅製品（図18—171）、鉛製品？（図16—128）、鉄製品（図14—96）

砥石—（図15—112、図16—122）

碁石—白（図16—132）

かんざし—ガラス製（図15—113）

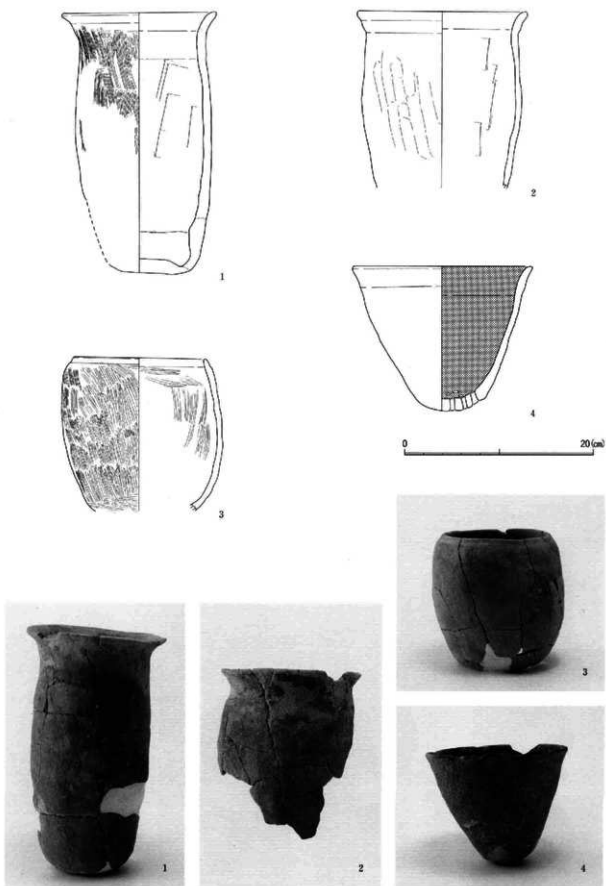


図8 写真27 古墳後期竪穴住居出土土器 (1:4)

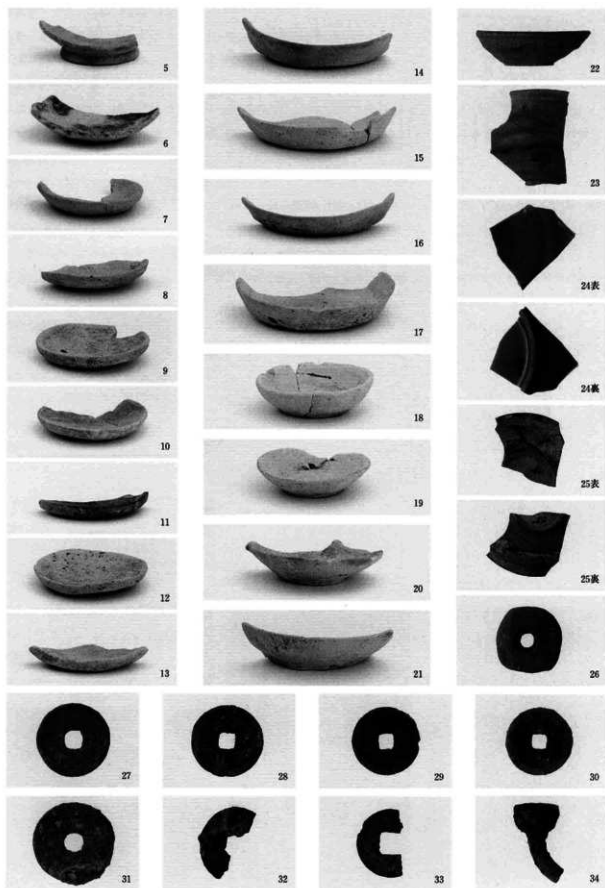


写真28 遺構出土遺物

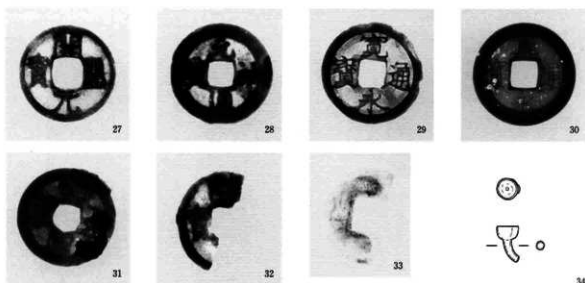
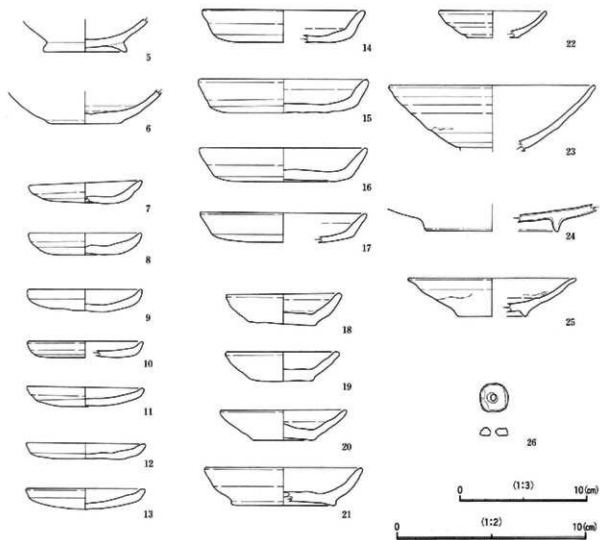


図9 区画清出土遺物 (1:3・34のみ1:2)

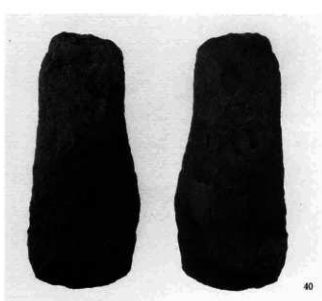


写真29 遺構出土遺物

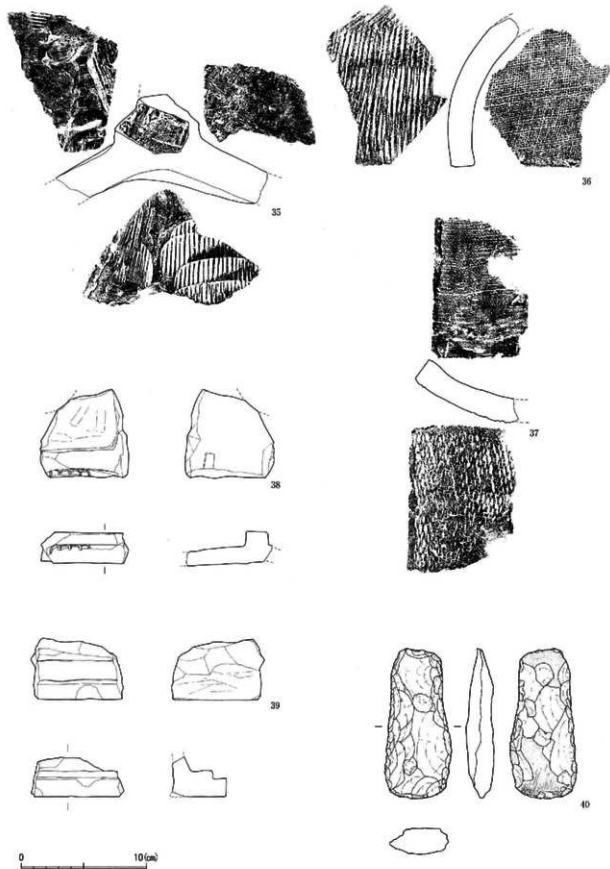


图10 区画清出土遺物 (1:3)

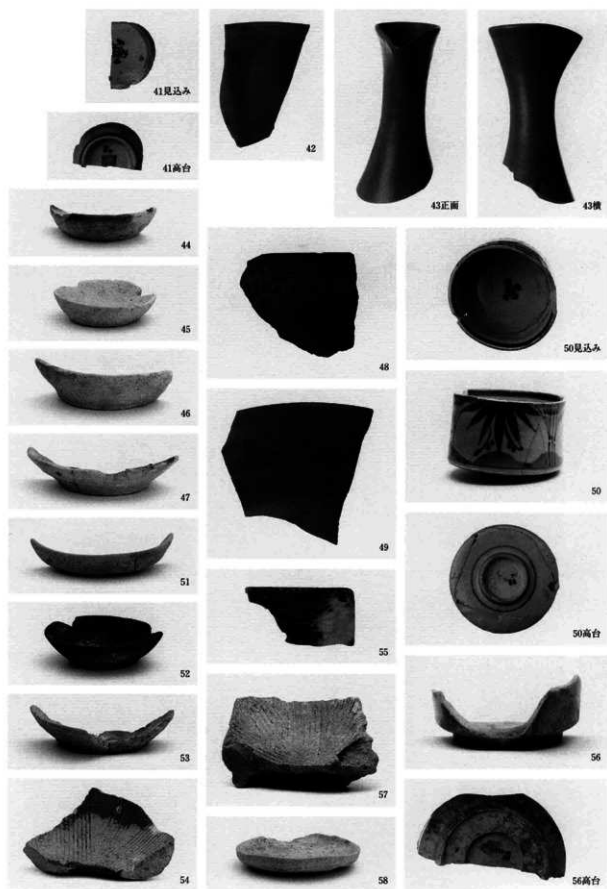
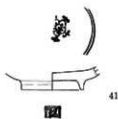


写真30 遺構出土遺物



SK2



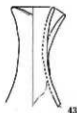
41

SK4



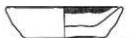
42

SK5

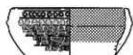


43

SK6



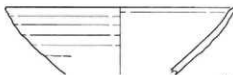
44



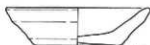
48



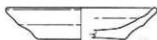
45



49



46



47



SK10



50

SK12



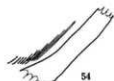
51



52



53



54

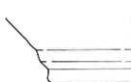
SK13



55

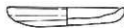


56



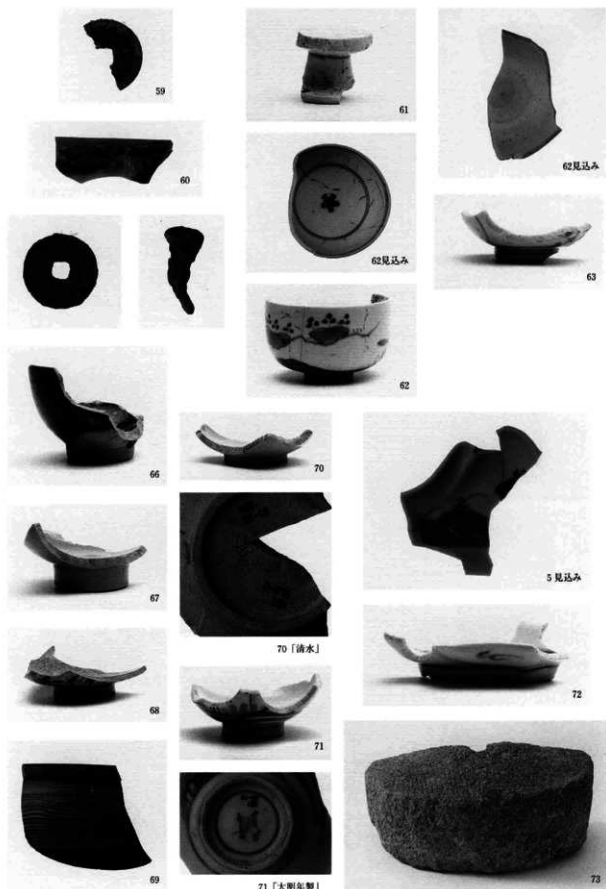
57

SK14



58

圖11 遺構出土遺物 (1 : 3)



71「大明年製」  
写真31 遺構出土遺物

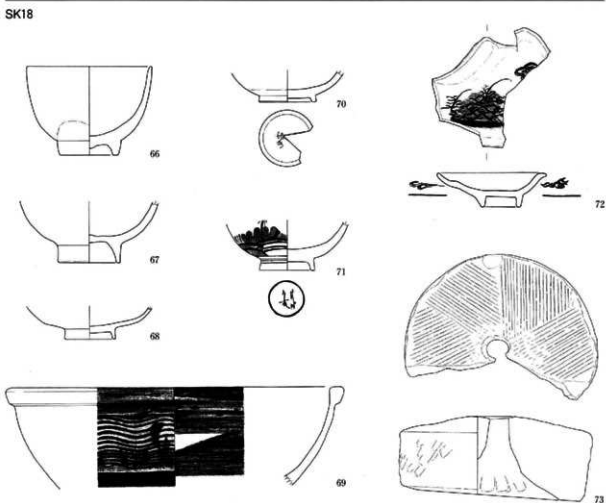
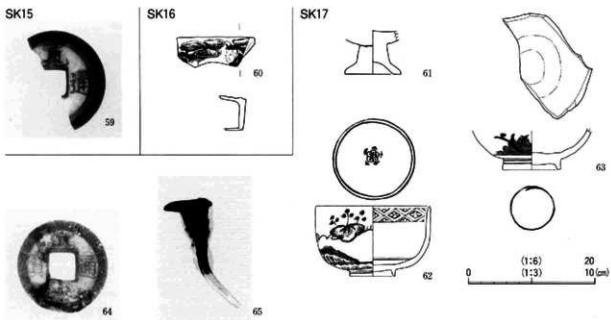


図12 遺構出土遺物 (1:3・73のみ1:6)

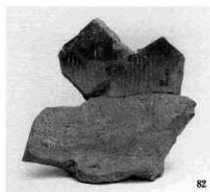
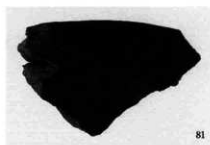
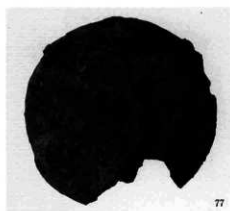
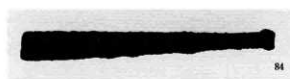
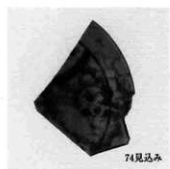
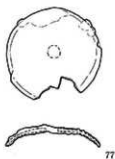


写真32 遺構出土遺物

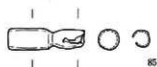
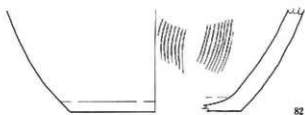
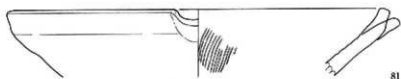
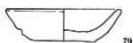
SK19



SK20



SK21



0 (1:3) 10(cm)

0 (1:2) 10(cm)

図13 遺構出土遺物 (1:3・77・84・85は1:2)

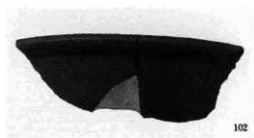
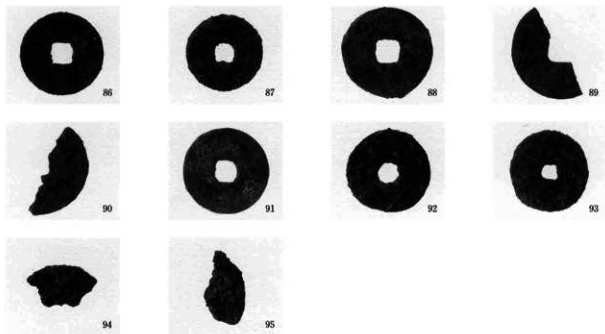


写真33 遺構出土遺物

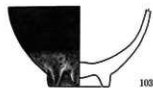
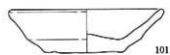
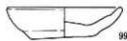
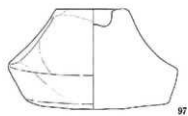
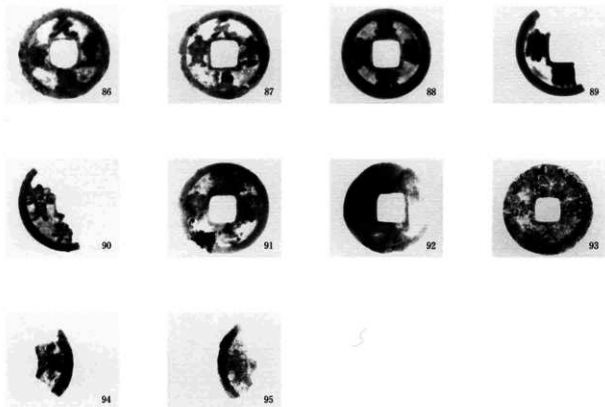


図14 遺構出土遺物（1：3・98のみ1：6）

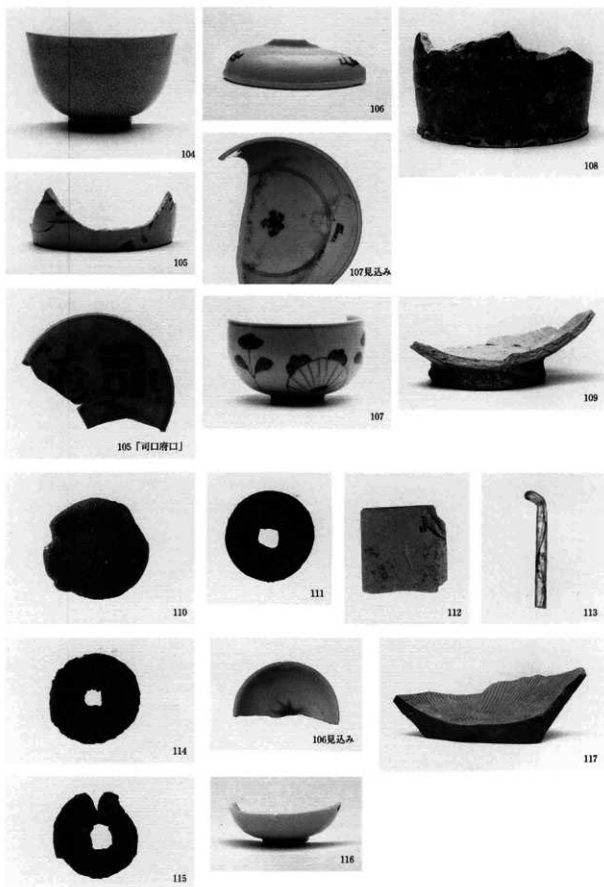
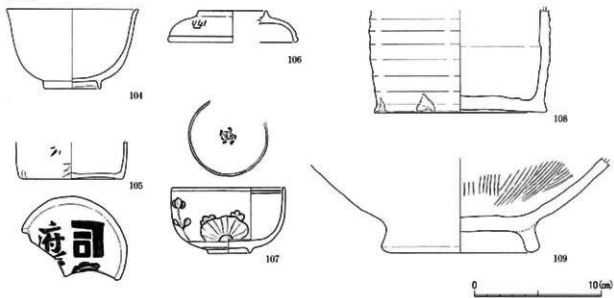


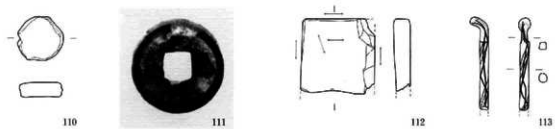
写真34 遺構出土遺物



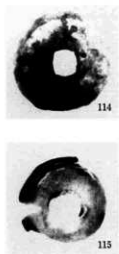
SK28



SK29



SK30



SK33

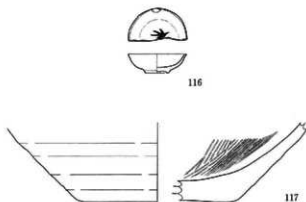


図15 瀬橋出土遺物 (1 : 3)



118表



118裏



119



120



121



122



123



124



126



129



131



125



130



132



127



128



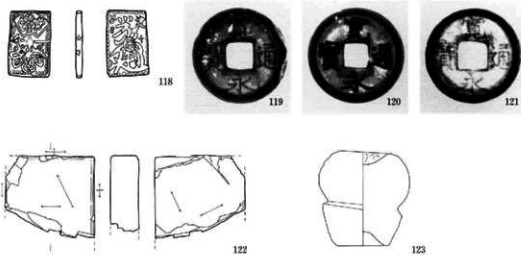
133



134

写真35 遺構出土遺物

SK33



SK34

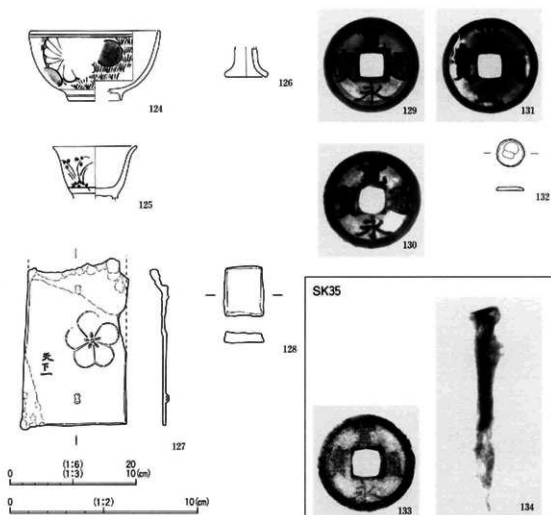


図16 遺構出土遺物 (1:3・128・129は1:2・124は1:6)



135



137



136



138



144



139



148上



147



140



141



148



142



145



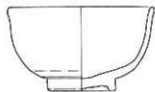
143



146

写真36 遺構・遺構外出土遺物

SK38



135

SX1



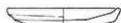
136

SX2



137

遺構外



138



145



139



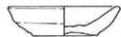
140



141



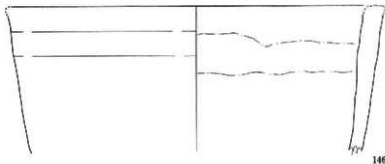
142



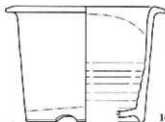
143



144



146



147



148

0 10 (cm)

図17 遺構・遺構外出土遺物 (1:3)

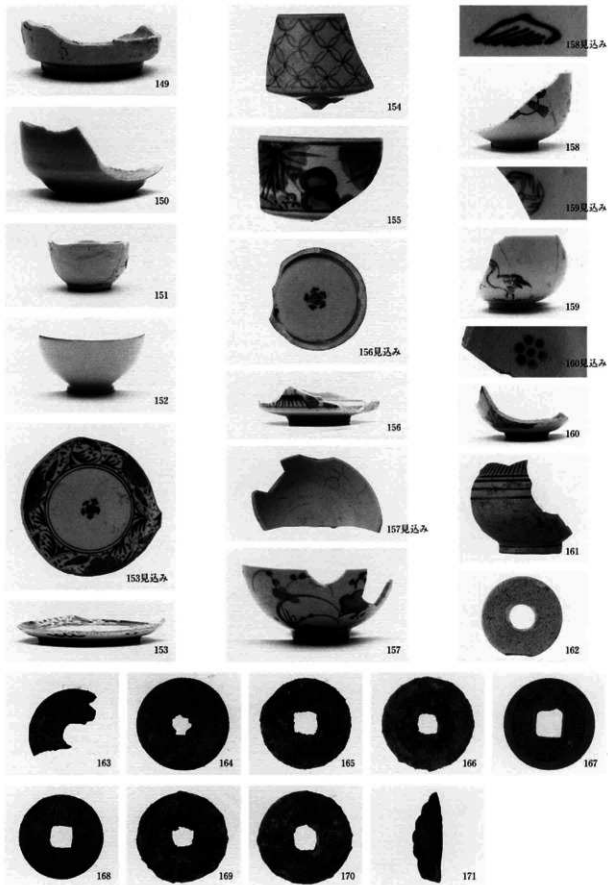


写真37 遺構外出土遺物

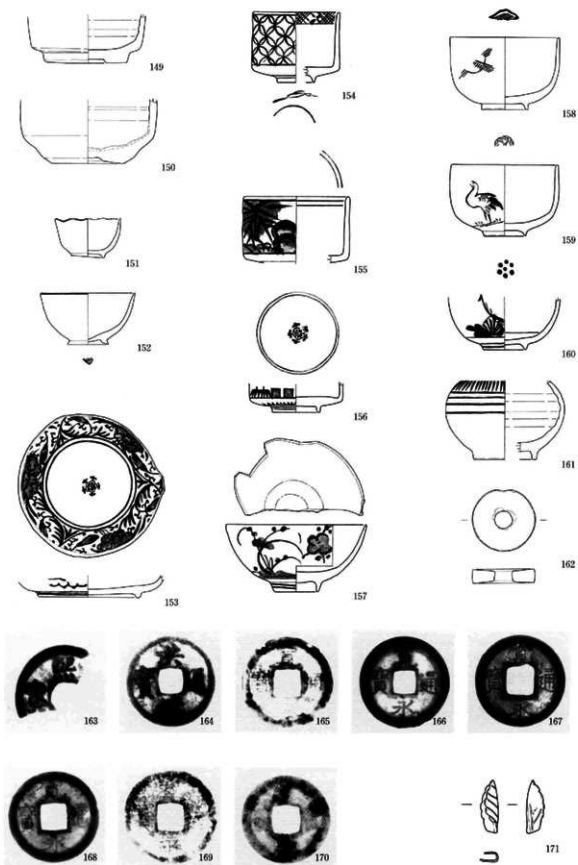


図18 遺構外出土遺物（1：3・171のみ1：2）

## 参考文献

- 江戸遺跡研究会 2001『因説・江戸考古学研究事典』柏書房
- 国立歴史民俗博物館 1997『中世食文化の基礎研究』国立歴史民俗博物館研究報告71
- 小林計一郎 2000『善光寺史研究』信濃毎日新聞社
- 坂井衛平 1969『善光寺史』東京美術
- 新宿区内藤町遺跡調査会他 1992『内藤町遺跡』
- 新宿区内藤町遺跡調査会他 1993『江戸のやきものと暮らし』
- 新宿区市谷本村町遺跡調査団 1995『市谷本村町遺跡』
- (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター 2001『瀬戸大窯とその時代』企画展図録
- (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター 2002『江戸時代の瀬戸窯』企画展図録
- (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター 2003『江戸時代の美濃窯』企画展図録
- (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター 2004『江戸時代の瀬戸・美濃窯』企画展図録
- (財) 瀬戸市文化振興財団 2005『江戸時代の瀬戸・美濃』企画展図録
- 東京都埋蔵文化財センター他 2005『新宿六丁目遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第163
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2004『土岐市収蔵品図録Ⅱ収蔵品にみる美濃窯の歴史』
- 長野県史刊行会 1982『長野県史 近世史料編 第七巻(三) 北信地方』
- 長野市教育委員会 1991『栗田城跡 下宇木遺跡 三輪遺跡(3)』長野市の埋蔵文化財第38集
- 長野市教育委員会 1994『栗田城跡(2)』長野市の埋蔵文化財第61集
- 長野市教育委員会 1998『長野遺跡群 西町遺跡』長野市の埋蔵文化財第87集
- 長野市教育委員会 2005『松代城下町跡(3)』長野市の埋蔵文化財 第109集
- 長野市教育委員会 2006『松代城下町跡(3)』長野市の埋蔵文化財 第114集
- 長野市誌編さん委員会 2000『長野史誌 第二巻 歴史編 原始・古代・中世』
- 福井市文化財保護センター 2004『福井城跡Ⅳ』
- 『増補 やきもの事典』平凡社
- 『古伊万里』1988平凡社
- 山梨県教育委員会 2004『甲府城下町遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第220集
- 『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集』2005文部科学省特定領域研究
- 『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』2005文部科学省特定領域研究
- (財) 和歌山県埋蔵文化財センター 1989『根来寺坊院跡』



## 報告書抄録

ふりがな	ながのいせきぐん ぜんこうじもんぜんまちあと
書名	長野遺跡群 善光寺門前町跡
副書名	殊竹風堂善光寺大門店地点
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第115集
編著者名	山野井智子 森田利枝
編集機関	長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL#26-284-0004 FAX026-284-0106
発行年月日	2006(平成18)年

所収遺跡名	所在地	コード		経緯度 (日本測地系)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
ぜんこうじもんぜんまちあと 善光寺門前町跡	長野県長野市 大字長野字大門 町511-1	20201	C-018	北緯 36°39'14" 東経 138°11'24"	2006.2.13 ～ 2006.3.23	300m <sup>2</sup>	新店舗建設
所収遺跡名	主な時代	主な遺構		主な遺物	要約		
善光寺門前町跡	古墳時代	竪穴住居1軒		土師器壺・土師器鉢・ 土師器甔ほか	当遺跡で確認した遺構は古墳時代・中世・近世である。出土遺物は縄文時代から近世までと幅広く、各時代にわたって居住域として利用されてきたことが窺える。特に中世からの遺構密度が濃く、門前町として発達した当地の特徴を現している。古代の遺構は確認していないが、出土した瓦は古代の善光寺を論じる上で重要な発見である。		
	中世	区画溝・土坑・掘立柱を伴う竪穴建物		土師皿・国産陶器・中国産磁器・古銭ほか			
	近世	建物基礎・土坑・地下施設		肥前系陶磁器・瀬戸美濃系陶磁器・古銭ほか			

長野市の埋蔵文化財第115集

長野遺跡群  
善光寺門前町跡

平成18年11月20日 印刷

平成18年12月1日 発行

編集 長野市教育委員会  
発行 文化財課埋蔵文化財センター  
印刷 葛友印刷株式会社